



Data

監督：マーレン・アデ
 出演：ペーター・ジモニシェック/
 ザンドラ・ヒュラー/イング
 リッド・ビス/ミハエル・
 ヴィッテンボルン/トーマ
 ス・ロイブル/トリスタン・
 ピュッター/ハーデウィッ
 ク・ミニス/ルーシー・ラッ
 セル

👁️👁️ みどころ

近時のリアム・ニーソンが主演した『96時間』（08年）3部作等では、父親の娘に対する愛情の示し方は単純明快だったが、本作は実に複雑。コンサル会社の有能な社員として懸命に働く娘に対する父親のおせっかいは、ありがた迷惑を超えた詐欺まがい、ストーカーまがいだ。

こんな父親はもうイヤ！そんな娘の叫びが聞こえてきそうだが、さて162分という長尺が織り成すハチャメチャな物語の行き着く先は・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■テーマは父娘間の愛情だが、かなりかなり・・・？■□■

父と娘の愛情を描く映画は多い。直接の父と娘ではないものの、小津安二郎監督の『東京物語』（53年）は、笠智衆と東山千栄子が演じる平山周吉、とみ夫妻と、原節子が演じる次男の嫁・紀子との愛情を描いた名作中の名作だ。また、近時のアクション映画では、フランス人俳優リアム・ニーソンが主演した『96時間』（08年）（『シネマルーム23』未掲載）、『96時間/リベンジ』（12年）（『シネマルーム30』未掲載）、『96時間/レクイエム』（14年）（『シネマルーム35』132頁参照）の3部作や、去る6月6日に観たメル・ギブソン主演の『ブラッド・ファーザー』（15年）が、娘のために命を賭けて闘う強い父親をテーマにした面白い映画だった。

本作も「その範疇」の映画だが、父娘間の愛情のパターンは千差万別だということが、本作を見ればよくわかる。というよりも、本作をみれば、父娘間の愛情と父娘間の確執（うとうしさ）は紙一重とだということが実によくわかる。しかし、ここまで徹底して、そのぎりぎりの姿を描いた映画は珍しいのでは・・・？その結果、本作は第69回カンヌ国

際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞しただけでなく、カイエ・デュ・シネマ2016年映画ベスト1等、世界中で40以上の賞を受賞している。

公式ホームページのイントロダクションにも「世界中が熱狂！！この父と娘に涙し、笑った」と書かれているから、これは必見！

■□■いったんは迷惑な父親の訪問を振り切ったが・・・■□■

悪ふざけが好きなお父さんは世の中にたくさんいるが、今は妻と離婚しドイツで愛犬と2人(?)で暮らしている元音楽教師のヴィンフリート(ペーター・ジモニェック)のそれは桁外れなので、本作導入部ではそれに注目！それに対して、東欧の国ルーマニアの首都ブカレストにあるコンサル会社で働いている一人娘のイネス(ザンドラ・ヒュラー)は、キャリア志向が強い、働き蜂の性格であることが一目でわかる、チョー生真面目な女性。きっとそのせいで今も婚期を逸しているのだらうと思っていると、案の定、本作中盤ではあっと驚く秘密の恋人(?)と2人で、あっと驚く性行動を……。それはともかく、本作導入部では、父親が離婚した妻のところに帰省したイネスが、束の間の再会を果たした父親との間でろくな会話も交わさず、携帯で仕事の話ばかりしている姿が際立っている。まあ、自分の身を振り返ってみても、仕事にバリバリ精を出す娘と父親との関係なんてそんなものだらうが……。

したがって、ブカレストに戻り、上司のゲラルト(トーマス・ロイブル)らと打ち合わせながら、大切な顧客との大切なプレゼンの準備をしているイネスのもとを突然ヴィンフリートが訪問してくると、イネスはビックリ。もちろん、そんな訪問が大いに迷惑なことにはわかりきっているが、それをはっきり言うわけにもいかず、何とか仕事先でも自宅内でも父親のちょっかい(?)をやり過ぎ、やっと帰らせることができたので、イネスはひと安心。そう思って、仕事の合間に父親の家に電話して、「預けた鍵の返還は今度でいいからね」と言おうとしたが、なぜか父親は電話口に出てこない。時間的にはもうドイツの自宅に戻っているはずだが、さてヴィンフリートは今どこに……？

■□■トニ・エルドマンって一体誰？■□■

すでに30歳を過ぎ40歳にも近い(?)イネスの男関係については、後半に登場するあっと驚く展開に注目。しかし、女もそんな歳になれば、様々な男関係はもちろん女友達同士でもいろいろあるのは当然だ。したがって、父親の「介入」によって大失敗になりかけたプレゼンを何とか挽回し、今晚はゆっくり「女子会」を楽しもうとしたイネスは、計3人の女子で、あるレストランを訪れたが、何とそこには、ダサイスーツ姿でかつらをかぶり、奇妙な入れ歯をした奇妙なおじさんが1人で座っていたから、イネスはビックリ！そのうえ、この男は厚かましくも、「はじめまして。トニ・エルドマンと申します」、と言いながら女友達に気安く声をかけ、挙句の果ては食事会にまで加ろうとしたから、さすが

にイネスはそれを断固拒否！

ちなみに、公式ホームページによると、本作のタイトルにもなっている「トニ・エルドマン」という男のプロフィールは次の通りだ。



彼のその後の行動を見てみると、「人生のコーチングをしている」という詐称は許せても、「ドイツ大使だ」との詐称は悪ふざけの域を完全に超えて、明らかに詐欺・・・？もっとも、人を欺罔して金目のものを詐取するわけではないから、彼の行為は刑法上の詐欺罪には該当しないが、「詐欺まがい」であることは明らかだ。しかして、この男（＝トニ・エルドマン）は、一体なぜこんな行動を・・・？162分という長尺の本作中盤では、手を替え品を替え、これでもかこれでもかと、まるでストーカーのようにトニー・エルドマンがイネスの前に登場し、イネスを大いに悩ませる（？）ので、その大展開に注目！

■□イネスの楽しみは？生き甲斐は？ホントに仕事が好き？■□

人間が生きる目的は一体何？それは、古今東西を問わず昔から追及されてきた大きなテーマだ。また、近代資本主義国になってからは、人は何のために仕事をするの？、何のために仕事してお金を稼がなくちゃならないの？が大きなテーマになってきた。68歳の私はそんな質問に対してそれなりの答えを確立しているが、現在、企業の合理化（＝大量の社員の首切り）のためのコンサル業務に邁進しているイネスは・・・？一見そんな「非人間的な行動も仕事のため」と割り切っているようだが、その本心は・・・？

イネスの父親ヴィンフリートがそんなイネスの仕事上の悩み苦しみをどこまで具体的に理解できているのかは疑問だが、どうも人生の達人らしいヴィンフリートは非人間的な仕事に埋没しているイネスの苦しみを直感的に理解し、少しでもイネスの気持ちを軽くしてあげたいと願っていたらしい。したがって、いったん娘と別れた後に、トニー・エルドマンとして再び奇妙な形で娘の前に現れるのは、そんな父親としての愛情のためらしい。

そんな2人の気持ちが少しだけ通じ合うのは、ある日石油採掘の現場を訪れ、その場で

解雇を言い渡された従業員に接するヴィンフリートの姿を見た時。イネスにとっては現場で1人でも首切りになればそれだけ仕事が減るわけだが、その解雇を必死で止めようとするヴィンフリートの姿を見ると、口では強がりと言いつつイネスの心は・・・？

■□■誕生日パーティがなぜヌードパーティに？■□■

本作では、イネスのそんな微妙な心の変化が、会社の同僚たちを招いて仕事上の結束を固めようとする彼女の誕生日パーティの席で思わぬ形で爆発するので、それに注目！誕生日パーティにはお祝いの品を持って訪問するのが礼儀だが、当日の服選びに悩んでいたイネスは、訪問のベルが鳴るとなぜか素っ裸のまま玄関へ。そして、イネスの姿を見てあっと驚く秘書のアンカ（イングリッド・ビス）、上司のゲラルト、秘密の恋人（？）たちに対して、本日の誕生日パーティはヌードパーティにすると宣言したから、アレレ・・・？

ヨーロッパ流の素っ裸の演技は日本的な色気に欠け、情緒不足が甚だしいため、私は全然好きではないが、女性監督のマーレン・アデがここまで平気で素っ裸の演出をしていることにビックリ！ここまででもかなりハチャメチャなストーリー展開だが、このシークエンスで本作のハチャメチャさはピークに！

■□■「クケリ」とは一体ナニ？この演出にビックリ！■□■

一瞬そう思ったが、いやいや、その後誕生日パーティの席に巨大な“クケリ”が登場してきたから、私を含む観客の本当のビックリのピークはここになる。公式ホームページによると、“クケリ”とは次の通りだ。



幸せを呼ぶ毛むくじやらの精霊<クケリ>

ブルガリアで毎年1月から3月の間に行われる伝統的な祭りの際に着用される被り物。イネスの誕生日パーティに登場する。

その昔、新春になるとブルガリアの様々な地域で、クケリに身を包んだ人々が、腰に付けたベルを鳴らしながら家々を訪れ、悪霊退治や家族の健康を祈っていた。現在もこの文化を継承している地域がある。日本の「ナマハゲ」に近い存在である。クケリは、五穀豊稔、子孫繁栄など幸せを運ぶものの象徴として今なお親しまれている。

これを被って誕生日パーティに出席しているのは一体誰？イネスもそれがわからなかったが、しばらく経てばそれが誰かは明らかだ。しかして、本作ラストにおけるこの“クケリ”の登場をイネスはどう受けとめるの？そして、あなたはそれをどう解釈？

仕事は金のためにするものではない。自分を見失うような仕事は嫌だ。自分にフィットした生き甲斐のある仕事に従事したい。誰もがそう願うが、私が面接した際に耳にする若

者たちのそんな言葉は概ね甘っちょろい考えの応募者ばかりだ。しかして、イネスの場合は、さて・・・？

イネスの自宅での誕生日パーティーに秘書のアンカが美しい裸体を見せてくれたのは私もうれしかったが、上司の裸も秘密の恋人の裸も私は見たくない。多分、それはイネスも同じだろう。なのに、イネスはあの時なぜ、ヌードパーティにしようと考えたの？それによって上司や同僚たちとの仕事上の結束が固まるとは到底思えないから、その後のイネスの首切りコンサル業務がどうなったかはあなた自身の目でしっかりと。そして、死ぬ思いで巨大な被り物を外したトニ・エルドマンことヴィンフリートの必死の行動による（？）父娘の絆の回復は・・・？

園子温監督ばりの（？）あっと驚くストーリー展開と、アクの強さがトコトン強調された本作は、嫌みな面もあるものの問題提起性は強烈。マーレン・アデ監督が自分と自分の父親との体験談を元にした本作は、好き嫌いは別として必見！

2017（平成29）年7月7日記